もっとみんなのための博物館になるために：Ｍ３プロジェクト実行委員会 2022 年度の活動から

大阪市立自然史博物館　学芸員　石井 陽子

１．はじめに

2019 年の国際博物館会議（ＩＣＯＭ）京都大会で継続審議となった新しい博物館定義が、2022 年プラハ大会において採択されたことは記憶に新しい。日本博物館協会により日本語訳された新しい博物館定義には、「誰もが利用でき、包摂的であって」という文言が盛り込まれ、博物館の基礎的条件として明記された。

発表者が勤務する大阪市立自然史博物館（以下、自然史博物館）は、1974 年に開館し、1986 年の展示更新、2001 年の増築、その後の複数回にわたる部分的な展示更新を経て、2024 年に開館 50 周年を迎えた。その間に、障害者基本法の改正（2011 年ほか）、バリアフリー法（2006 年）および障害者差別解消法（2016 年）の施行があった。また、「障害の社会モデル」と呼ばれる考え方が浸透した。すなわち、障害のある人の困難は社会が作り出した障壁によるもので、それらを解消するのは社会の責任であるという考え方である。博物館もまた、どのような人でも利用できる施設になるよう、自ら障壁を解消するように務めることが求められる時代となった。

２．自然史博物館の現状と、Ｍ３プロジェクト実行委員会発足に至るまで

１）自然史博物館の現状

先にも述べたが、自然史博物館は 1974 年に開館し、1986 年に全面的な展示更新を行った。開館当初から少数の触察展示があったが、1983 年に視覚障害者団体から大阪市への要請があり、それを受けて 1986 年の展示更新に前後して、化石や岩石を中心とした触察展示と展示品を解説する点字パネルの設置を行った（大阪市立自然史博物館，1987）。この時に触察展示を中心とした館の概要を紹介する解説冊子を、点字と見えづらい人を対象とする大きな文字でそれぞれ作成した。点字や大きな文字による冊子は、その後 2020 年まで作成しなかった。2001 年の増築で新設された「地域自然誌展示室」にも、岩石標本や樹木の幹の輪切りなどの触察展示とそれに付随する点字や大きな文字によるラベルを設置した。シカやカジカ

ガエルの鳴き声が聞こえる展示もあるが、点字や大きな文字による解説パネルはない。その後、本館を中心に部分的な展示更新を複数回行ったが、触察展示や点字・大きな文字による解説パネルの増設は行ってこなかった。

建物については 2001 年の増築以降、長居公園の外周園路から本館 1 階まで大きな段差がなくなり、車椅子やベビーカーでの来館への障壁は解消されている。一方、本館 1 階から 2 階へは第 2 展示室内の階段で移動する順路になっており、車椅子やベビーカーではいったん展示室からナウマンホールに出て、エレベーターを使用する必要がある。

2）M３プロジェクト実行委員会前史

2019 年 1 月のある日、自然史博物館本館で発表者が窓口当番をしていた際に、「今度、視覚障害のある子ども達と来館したいのだが、楽しめるような展示や企画はないか」という相談を受けた。NPO 法人「弱視の子どもたちに絵本を」の田中加津代理事であった。展示室の触察展示を案内したが、その際に触察資料の解説パネルの内容が果たしてこれで良いのだろうかという疑問を持った。また、博物館の展示の多くが展示ケースに収められていて、視覚障害のある人達には利用しづらい施設なのだろうということも、改めて認識した。同年 3 月に田中理事が子ども達と来館された時には、学校向けの貸し出し教材にもさわってもらうなどした。2020 年 1 月には彼らを対象とした収蔵庫ツアーを行った。2020 年度には笹川科学研究助成の実践研究部門に採択され、「弱視の子どもたちに絵本を」の協力を得て、触察展示パネルの内容の見直しや点字や大きな文字による冊子の内容の見直しを行った。その際には視覚障害当事者に来館いただく、オンライン会議に参加いただくなどして意見を伺った（石井ほか，2022）。同時に（地独）大阪市博物館機構として受けた令和 2 年度文化庁補助金事業「地域と共働した博物館創造支援事業」により、社会福祉法人日本ライトハウスによるコンサルティング（展示、web サイト）、視覚障害者接遇研修を行った。さらに、笹川科学研究助成により行った解説冊子改訂版と触察パネルの点訳を、日本ライトハウスに依頼して行った。2021 年度にも令和 3 年度文化庁補助金事業「地域と共働した博物館創造支援事業」により、日本ライトハウスに依頼して、博物館施設についてのコンサルティングと視覚障害者接遇研修を実施した。日本ライトハウスよりいただいたご意見を元に、前年度に作成した大きな文字による冊子の改訂を行った。年度末には、オンラインによる視覚障害者展示見学支援シンポジウム「開かれた博物館へ：視覚障害者の方とともに楽しむ」を行った。2022 年 4 月上旬には「弱視の子どもたちに絵本を」を対象に、収蔵庫見学ツアーを行った。

自然史博物館職員による活動とは別に、自然史博物館を拠点とするサークル内に発達障害のある子ども達の博物館体験の支援を行う「てこぽこさんとはくぶつかん」が発足し、活動を開始したのもこの頃である。

３．Ｍ３プロジェクト実行委員会の発足とその活動

１）Ｍ３プロジェクト実行委員会とは

2022 年度（令和 4 年度）の後半の半年間は、文化庁による助成事業 Innovate MUSEUM の助成を受け、Ｍ３プロジェクト実行委員会として活動した。Ｍ３とは、「もっとみんなのミュージアム」のローマ字表記の頭文字であり、自然史博物館の佐久間大輔学芸課長による命名である。Ｍ３プロジェクト実行委員会は、自然史博物館を中核館とし、東洋陶磁美術館、大東市立歴史民俗資料館、高槻市立自然博物館、大阪市長居障がい者スポーツセンター、（地独）大阪市博物館機構で構成された。自然史系博物館、美術館、歴史系博物館といった様々な館種の博物館施設だけでなく、自然史博物館と同じ長居公園内に立地する障がい者スポーツセンターにも加わっていただいた。各館が希望する障がい者支援事業や研修を一緒に企画して実施するということを通じて、各館や大阪周辺の博物館関係者の障がい者博物館利用促進への意識向上やスキルアップを目的とした。長居障がい者スポーツセンターは、障がい者支援を専門とし、もとより障がいのある人達が多く利用する施設であるので、スポーツセンターを会場にワークショップや講演会を共催していただくという形を取った。自然史博物館総務課と大阪市博物館機構事務局が事務を分担した。先に述べた「弱視の子どもたちに絵本を」「てこぽこさんとはくぶつかん」に加え、子ども向けワークショップの開発や実施を行う「ちゃめっこ・はくぶつかん」、介助犬への理解促進や障がい者支援を行っている「介助犬のひろば実行委員会」等、各館に関係のある様々な団体にご協力いただいた。また、博物館職員向け研修の講師をお願いした方の多くが、博物館施設で障がい者の利用を視野に入れた先進的な活動をしている博物館関係者であった。

２）Ｍ３プロジェクトの活動内容

Ｍ３プロジェクトとして実施した活動内容の項目と概要を以下に挙げる。なお、URL を付したものは、2024 年 12 月現在でも視聴や閲覧が可能である。

Ａ．視覚障がい者に博物館を豊かに楽しんでもらうためのプログラム開発と試行

ａ．収蔵品レプリカに触って楽しんでもらうプログラムの工夫と試行

① 3D データ・3D プリンター活用のための研修

日時：2022 年 11 月 15 日　会場：自然史博物館　参加者：10 名　講師　野寺凜氏（黒部市吉田科学館）　対象：博物館関係者

3D データ・3D プリンター活用事例の講演に続き、講師の指導のもと 3D データを作成し、3D プリンターでの出力を試みた。

② 美術品レプリカ制作と触察ワークショッププログラム開発

美術品レプリカの作成、およびそれらを用いた触察ワークショッププログラムの開発、実施。ワークショップ実施の前後に、プログラムの開発や改良を目的に、視覚障がい当事者の意見を伺う機会を設けた。

カラフルアート・ワークショップ「さわってみよう東洋陶磁」（図 1）

日時：2023 年 3 月 5 日　会場：自然史博物館　講師：東洋陶磁美術館学芸員、「ちゃめっこ・はくぶつかん」スタッフ　対象者：視覚障がい当事者と付き添いの方　参加者：午前：視覚障がい当事者 2 名、付き添い 2 名、午後：視覚障がい当事者 4 名、付き添い 2 名

図 1 ：美術品レプリカの触察ワークショップ

B．視覚障がい者に常設展示を楽しんでもらうための改良・工夫

a．セルフガイドの作成（点字・墨字パンフレット作成、触察案内図試作、先行事例調査）

点字版「展示見学ガイド」の増補・改訂、「展示項目リスト」の点字冊子、墨字冊子の作成。触察案内図（点字・ピクトグラム使用）を、「弱視の子どもたちに絵本を」の協力の下で試作。先行事例調査（浜松科学館、徳島県立博物館）、情報収集（全国科学博物館協議会研究発表会）。

b．視覚障がい者接遇向上のための博物館職員向け研修「視覚障がい者への対応を通じた博物館の魅力発信」

日時：2023 年 1 月 23 日、30 日　会場：自然史博物館、大東市立歴史民俗資料館　参加者数 13 名、7 名　対象：博物館関係者　講師：「介助犬のひろば実行委員会」剣持悟氏、山下守氏（視覚障がい当事者）

C．発達障がいのある利用者のためのプログラム開発と研修実施

a．発達障がいのある利用者のための博物館を楽しむプログラムの開発と実施

「てこぽこさんとはくぶつかん　ワークショップ」

日 時：2022 年 12 月 17 日、18 日

会場：大阪市長居障がい者スポーツセンター　対象：障がい当事者と付き添いの方　講師：てこぽこさんとはくぶつかん　参加者数：98 名

博物館や自然に関係があり、かつクリスマスイベントにふさわしい図柄のバッジかエコバッグを選択して作成できるようにした。各種の障がいのある人に配慮した作業過程や材料の配置を

図 2 ：「てこぽこさんとはくぶつかん ワークショップ」

行った（図 2）。

ｂ．発達障がい者への理解とより良い
施設利用を促すための講演会と研修

① 障がいへの理解促進のための講演会

障がいの理解講座特別編「” 自律神経 ” がキーワードー「好き」が整えていく心」

日時：2023 年 2 月 23 日　会場：大阪市長居障がい者スポーツセンター及び YouTube ライブ配信　講師：三家英彦先生（精神科医）　対象：障がい当事者と支援者　参加人数：対面 44 名、配信 23 名　3 月 2 日～ 20 日の間、YouTube 長居障がい者スポーツセンターチャンネルで見逃し配信、視聴回数 450 回

② やさしい日本語とソーシャルストーリーガイドについての研修

日時：2023 年 1 月 23 日　会場：オンライン（高槻市立自然博物館で実施予定だったが大雪により変更）　講師：高尾戸美氏（多摩六都科学館）　対象：博物館関係者

参加者数：19 名

講師による講演に続きグループワークでやさしい日本語でのパネル文案作成やソーシャルストーリーガイド作成を試行。後日、最寄りバス停から高槻市立自然博物館へのソーシャルストーリーガイドの WEB ページを作成、公開した。https://aquapia-akutagawa.jimdofree.com/

③ ソーシャルナラティブとセンサリーマップについての講演会

日時：2023 年 3 月 10 日　会場：オンライン　講師　鈴村麻由子氏（三重県立美術館）　対象：博物館関係者　参加者数：20 名　アーカイブの後日配信の視聴回数：同年 3 月末までに 121 回

ASD や感覚過敏のある利用者に安心して来館してもらえるためのソーシャルガイドやセンサリーマップの自館での作成プロセスや、国内外での事例を紹介いただいた。https://www.youtube.com/watch?v=dYJUxgHeEoc

Ｄ．様々な人がともに博物館を楽しむためのイベント・講演会の実施

ａ．大阪自然史フェスティバルへの参加の促進と障がい者支援団体の出展

日時：2022 年 11 月 19・20 日　会場：自然史博物館　参加者数：17,300 名

約 90 団体の自然観察団体に加え、「てこぽこさんとはくぶつかん」、「弱視の子どもたちに絵本を」に出展を依頼。自然史フェスへの参加促進のためにチラシや幟を作成した。http://www.omnh.net/npo/fes/2022/

ｂ．インクルーシブな博物館のための講演会・シンポジウムの実施

① 博物館のユニバーサルデザインについての講演会

「かっこええ博物館をつくろう！」

日時：2022 年 12 月 23 日　会場：オンライン（Zoom）　講師：安曽潤子氏（インクルーシブミュージアム代表）　参加者数：当日 47 名、アーカイブ視聴 8 名

講師が作成にかかわった「博物館・美術館における ユニバーサルデザイン 推進サポートブック」（総務省）を踏まえ、博物館の改修時に配慮すべきポイントについて、基本的な発想、動線の課題、当事者参加の重要性などについて講演いただいた。

② Ｍ３プロジェクト総括座談会

「これから『もっとみんなのミュージアム』を実現していくために」

日時：2023 年 3 月 12 日より YouTube で公開　視聴数：公開から同年 3 月末までの 9 日間で 195 回の視聴

講師：塩瀬隆之氏（京都大学総合博物館准教授）コメンテーター：島絵里子氏、堀井洋氏

自然史博物館より M3 プロジェクト活動報告、塩瀬氏による「「インクルーシブデザイン」社会課題を達成するためのデザインの力」のレクチャーに対しコメント、議論。https://www.youtube.com/watch?v=U-5Uh-t8quQ

４．ふり返りとＭ３プロジェクト実行委員会の今後

令和 4 年度 Innovate MUSEUM 事業の助成期間は、年度の後半の半年間であった。一定期間に集中して特定の内容の研修やイベントを行うことにより、対象となる博物館関係者に一定の影響力を与えることができたとは思う。関西圏の様々な館からの参加があったが、中にはこれまで付き合いのなかった館の職員も含まれた。が、参加者が違いに情報交換ができる関係にまでは、なることができていない。障がい当事者に対しては、より広く博物館施設を認知してもらうことにはつながったと思われるが、その後の来館増につながったかの評価ができていない。

本事業は実施内容が多岐にわたり、事務的な書類作成をお願いした総務課職員にも負担を掛けてしまっただけでなく、発表者自身も連絡調整にかなりの労力を掛けることになった。さらに、同時期に「弱視の子どもたちに絵本を」の視覚障害のある子ども達を対象とした 3 回連続のワークショップ「自然のたんけん」を、沖縄大学の盛口満氏や「てこぽこさんとはくぶつかん」、自然史博物館学芸員や視覚障害当事者と協力して実施するなどした。これについては別の機会に紹介したい。さらに発表者は 2022 年 12 月～ 2023 年 2 月開催の特別展「大阪アンダーグラウンド RETURNS」の主担者でもあり、例年より多くの仕事をこなすことになった。若干の燃え尽き症候群状態となり、改めて振り返ると数年間に渡って少しずつ行うのでもよい内容を半年間で行ってしまったことが分かった。その後Ｍ３プロジェクト実行委員会は休止状態であるが、2025 年 1 月に、RISTEX の助成により視覚障害者を対象に 3D 造形物作成と配布を行うプロジェクトである「3D4SDGs」の南谷和範教授（大学入試センター）と渡辺哲也教授（新潟大学工学部）によるオンライン講演会、2 月には同「3D4SDGs」による 3D 模型作製講習会を行う予定である（2024 年 12 月現在）。

このような取り組みは、少しずつ、かつ長く継続して知見を蓄積し、博物館職員や博物館の周囲の人々の意識向上を継続し、来館者対応や、いずれ想定される展示や建物の更新の際に活かすことが必要であろう。少額で構わないので複数年にわたって継続的に助成をうけることができる助成制度があると、持続可能な活動ができると考える。あるいは、設置者の理解を得ることができれば、毎年の人権研修として実施することも可能かもしれない。

発表者や「てこぽこさんとはくぶつかん」のメンバーが、障害のある人達の展示見学支援や博物館体験への支援の必要性に気付くことができたのは、博物館での窓口対応やサークル活動で様々な市民のみなさんと関わりを持っていたことによる。また、Ｍ３プロジェクト実行委員会の活動は、それぞれの館や団体と縁のあるグループや個人とのつながりに支えられた。自然史博物館が市民に開かれた博物館であったために、来館者の要望から課題の存在に気が付くことができ、本報告の活動にも繋げることができたと考える。

文献

大阪市立自然史博物館（1987）　常設展展示更新 . 大阪市立自然史博物館館報 13.p6-7

石井陽子・北村美香・釋知恵子・島絵里子（2022）　さわれる展示の解説パネル・見学ガイド冊子改訂による視覚障害者の展示見学支援：大阪市立自然史博物館の事例．日本ミュージアムマネジメント学会会報89.p12-13　（https://www.jmma-net.org/file/821　20241210閲覧）